

## pius, pietas について

谷 栄一郎

はじめに

- I ギリシアにおける「敬虔」*hosiotēs, eusebeia*
  - II ギリシア、ローマにおける孝子のイメージ
  - III *pius Aeneas* の伝承
  - IV アエネーイスにおける *pius Aeneas*
- まとめ

はじめに

英語の形容詞 *pious* とその名詞形 *piety*、フランス語の形容詞 *pieux* とその名詞形 *piété* はラテン語の形容詞 *pius*、その名詞形 *pietas* に由来し、「敬虔な」「敬虔」を意味している。イギリスもフランスも古くからのキリスト教国であり、当然ながら「敬虔」とはキリスト教的敬虔に他ならない。しかしキリスト教的敬虔なるものは4世紀始めコンスタンティヌス帝がキリスト教を公認し、キリスト教がローマ帝国全土に広がることにより初めて一般化していったもので、それまでの異教のローマにおいて *pius*、*pietas* が指すものは自ずと異なっていた。近代語で宗教のことは *religion* と言うが、古典ギリシア語、古典ラテン語にはこれに相当する単語はない。ラテン語の *pietas* は人間の神々に対する宗教的態度を表わす重要な語のひとつであった。ウェルギリウスが書いたローマの英雄叙事詩アエネーイスの主人公アエネーアースにはしばしば *pius* という *epithet* がつけられ、この *pius Aeneas* は理想的ローマ人を表していると考えられてきた。ローマ人自身、武勇の徳と並んでこの *pietas* という特質をローマ人を最も特徴づける性格として強調している<sup>(1)</sup> が、ポリュビオスのようなギリシアの歴史家やポセイドニオスといった哲学者までがローマ人のこの特質（ギリシア語では *eusebeia* という語を使っている）を賛嘆せずにはおかなかった。<sup>(2)</sup> しかし *pietas* の概念は一般に考えられているように本当にローマ独特の概念なのであろう

か、ギリシア的敬虔とローマ的敬虔を比較しながら考えてみたい。

### I ギリシアにおける「敬虔」*hosiotēs, eusebeia*

ラテン語の *pius, pietas* に相当するギリシア語は *hosios, hosiotēs* もしくは *eusebes, eusebeia* と考えられる。*hosios* と *eusebeia* はほぼ同義であるが、後者が神々と儀式に対する敬意を表しているだけなのに対し、前者では道徳的ニュアンスが付け加わっているとされる（Chantraine）。<sup>(3)</sup> *eusebeia* の語源は明瞭で、*eu*（よく）と *sebesthai*（恐れ敬う）からなり、*sebesthai* は名詞 *sebas* から来ているが、*sebas* は神的なものに対する恐れ、驚嘆を表す。従って *eusebeia* は「神々を恐れ敬うこと」と解することができるが、これだけではもちろん十分ではない。クセノポンの「ソクラテスの思い出」（IV、6）には *eusebeia* についてのソクラテスとエウテュデモスの問答が載っている。そこでは結論として *eusebes*（敬虔な人）とは「神々に関してしかるべき敬いの仕方を心得ている人」と定義される。ただ神々を敬うだけでは十分ではなく、しかるべき敬い方 *hoi nomoi, ta nomima* が強調されている。*hoi nomoi, ta nomima* とは言うまでもなく父祖伝来の神々の祭り方であり、この礼拝の慣習に則って神々を敬うものが *eusebes*（敬虔な人）なのである。

*hosios* の語源の方ははっきりしない。文献的にはホメロスに *hosie* という形で現れるのが最初である。いずれも *oukh hosie* という形で使

(4) われ、「神の掟にかなわない」という意味である。これはラテン語の *non fas est* という表現に当たる。ケレーニイはホメロスの例の一つが殺人の企てが語られた箇所であること、またもう1例は殺された人々を前にしての発言であることなどから *hosia* とは死者崇拝的ニュアンスを持った語と考えている。<sup>(5)</sup> デーメーターが自ら指示して用意させたカクテルを受け取るのも、神々が奉獻された肉を食べるのも *hosie* と考えられていたとすれば、確かに神々や死者が自らの権利を受けることが *hosia* であり、そうあるように注意を払う人が *hosios* であると考えてよいようである。プラトンの対話編エウテュプロンは雇人を死なせてしまった父親を告訴するエウテュプロンとソクラテスが *hosiotes* (敬虔) とは何であるか、その定義を求めて対話が進められている。残念ながら結論は出されていないが、*hosios* は *dikaios* (正義) の一部であること、それも神々の奉仕に関わる部分であることが、明らかにされる。<sup>(6)</sup> 実際、*hosios* と *dikaios* はよく対にして使われ、法の中、人間に関する部分が *dikaios*、神々に関する部分が *hosios* としてよいようである。普通のアテナイ人の間で具体的にどのような行為が敬虔と考えられていたのかは、次のエウテュプロンの言葉がよく示している。

「神々に祈ったり、犠牲を捧げたりして、神々に喜ばれるようなことを言ったり行ったりすることをわきまえているならば、それが *hosia* であり、そういったことが個人の家を救い、国家をも救うのです。それと反対のこと、神々に喜ばれないようなことが *asebeia* (不敬) であり、それは一切を転覆し、滅ぼすのです。」<sup>(7)</sup>

ソクラテスは「祖国の神々を認めず、青年を墮落させている」として告発された。ソクラテスは言わば不敬罪に問われたわけであるが、プラトンの「ソクラテスの弁明」によると、神々を認めないという告発に対しては十分な弁明がされなかったようである。クセノポンは「ソクラテスの思い出」の中で、ソクラテスが如何に *eusebes* (敬虔) であったか、詳述している。それによるとソクラテスは家の祭壇においても、国の祭壇においてもしばしば犠牲を捧げ、卜占を積極的に利用したとある。<sup>(8)</sup> 敬虔であった証拠として祭壇に犠牲を捧げるといふ外面的な宗教慣習が重視されていたこ

とがわかる。クセノポン自身このようなソクラテスの弟子であり、*eusebes* (敬虔) であった。

彼が著した戦記「アナバシス」を読むと敬虔なギリシア人たちが具体的にどのような行動をしたのかよくわかる。クナクサの戦いの後、ギリシア軍の将軍たちがティッサペルネスの背信によって捕らえられて殺されるという危機に直面した時クセノポンやその他の隊長は敵が偽りの誓いをして神を蔑したがゆえに神々はかならず自分たちに与してくれると互いに鼓舞し合い、クセノポンが「神々の加護の下に無事脱出の明るい希望がいくらでもある」と演説している時、くしゃみをした者がいた。以下、訳で原文を引用すると、

「兵士たちはそれを聞くと、全員一斉にひざまずいて、吉兆を示し給うた神に拝礼をした。そこでクセノポンが言うには、『諸君、あたかもわれわれが無事脱出について語っている折に、救いの神ゼウスの前兆が出現したのであるから、われわれはこのおん神に願をかけ、何処であれ友好的な地域に達した時には、即座に無事脱出を感謝する犠牲を供えることを、また他の神々にも、能う限りのお供えをすることを誓うべきであろうと思う。これに賛成の者は手を挙げてくれ。』全員が挙手し、ついで神々に祈願して誓い、関の声を挙げた。」<sup>(9)</sup> (松平千秋訳)

また、ギリシア軍がシノペのハルメネ港に着いたとき、兵士一同がクセノポンをただ一人の指揮官に選ぶことを望み、クセノポン自身も総指揮官になって名声を挙げたいという欲望が強かったにも関わらず、自らの決断を差し控え、ゼウスに犠牲を捧げたが、生贄の卦が不可と出たので受諾しなかった。<sup>(10)</sup>

このような箇所を見ると戦争という異常事態にあってもギリシア人が如何に敬虔であったか、驚かされる。誓約は神聖なものであり、破れば神罰が下ると信じていたこと、神々は自分の意志を明らかにするため人間にさまざまな吉兆、凶兆を送ると信じていたこと、祈りに際してしばしば願をかけたこと、未来のことに関して進んで卜占を行い、その結果をことのほか尊んだことなどがわかる。こうしたギリシア人の敬虔さはローマ人のそれと較べてほとんど遜色ないように思える。

## II ギリシア、ローマにおける孝子のイメージ

大プリニウスはその博物誌第7巻で人間のさまざまな徳行を取り上げているが、<sup>(11)</sup> pietas の模範としては5例を紹介している。その中で際だっているのは pietas の神殿にまつわる伝説である。それによると、卑しい平民の女が出産して間もなく、母親が投獄され、何の食物も与えられずにいるのを見ると、毎日面会に出かけては、こっそり自分の乳房で母親の飢えをしのいでやった。このことが発覚したとき、人々は娘の孝心に打たれ、母親を釈放し、その場所に pietas の神殿を建てたという。この話で注目すべきことは pietas の神殿であるにも関わらず、神々に対する敬虔は全く問題にされていないことである。pietas の神殿は他にもあったと伝えられるが、そうした神殿が人間と神々間の良好な関係を願うものではなく、親と子供間の良好な関係を願うものであったということは重要である。pietas という語が含んでいた宗教的ニュアンスが薄れかかっていたことを意味するからである。実際、大プリニウスが挙げている他の4例も、夫の妻に対する思いやり、兄弟愛、解放奴隷の旧主人に対する忠義を扱っていて、神々に対する敬虔とは関係がない。ヒュギーヌスの「演劇」は何かギリシア原典のラテン語訳のようであるが、その中でもっとも pius な者たちという項目がある。<sup>(12)</sup> そこで挙げられている女性はアンティゴネ、イリオネ、ペロピア、ヒュブシピュレ、エリゴネ、クサンティッペ、テューローで、父に対する孝心もしくは兄弟愛の際だったものたちである。もっとも pius な男たち (piissimi) の例としては、シキリアのアエトナ山の噴火の時母親、父親を背負って逃げたダーモンとピンティア、トロイヤ落城の時父親アンキーセースを肩にかついで逃げたアエネーアース、それとクレオプス（正確にはクレオビス）とビティアス（ビトン）というふうにしてすべて孝子の話である。ヒュギーヌスはクレオビスとビトンの話だけを詳しく紹介しているが、これは元々はヘロドトスの「歴史」で紹介されている逸話の一つでソロンがリュディア王クロイソスに語ったとされているが、この話がローマ人の間で好まれていたことはキケロのトゥスクルム談論を見てもわかる。<sup>(13)</sup> ヘロドトスとヒュギーヌスではテキストに問題のある異同がある。先ずヘロドトスを引用する。

「アルゴスでヘラ女神の祭礼のあった折のこと、

彼らの母親をどうしても牛車で社まで連れてゆかねばならぬことになりました。ところが牛が畑に出ていて時間に間に合いません。時間に追われ、二人の青年が牛代わりに軛に就いて車を曳き、母を乗せて45スタディオンを走破して社へ着いたのでございます。〈中略〉母親は息子たちの奉仕と、二人の良い評判とをいたく喜んで、御神像の前に立って、かくも自分の名誉を掲げてくれた息子のクレオビスとビトンに、人間として得られる最善のものを与え給え、と女神に祈ったのでございます。この祈りの後、犠牲と饗宴の行事があり、若者は社の中で眠ったのでありますが、再び起き上がることはありませんでした。これが二人の最後だったのでございます。アルゴス人は二人を世にも優れた人物だとしてその立像を作らせ、デルポイへ奉納いたしましたのでございます。」（松平千秋訳）（Herod. I. 31）

実際、紀元2世紀にギリシアを旅行して回ったパウサニアスは母親を牛車に乗せて運ぶ二人の石像があったことを伝えている。<sup>(14)</sup> 母親を車に乗せて運ぶ孝子の姿がギリシア人の感動を呼んだことは間違いない。次にヒュギーヌスの記述を引用する（ただし、名前はヘロドトスに従って正しい形に直しておく）。

Cydippe sacerdos Iunonis Argivae cum boves in pastionem misisset neque ad horam qua sacra in monte ad templum Iunonis duci et fieri debererent apparerent et essent mortui, quae nisi ad horam sacra facta essent, sacerdos interficiebatur; inter quam trepidationem Cleobis et Biton pro bubus sub iugo se iunxerunt et ad fanum sacra et matrem Cydippen in plastro duxerunt, sacrificioque peracto Cydippe precata est Iunonem, si sacra eius caste coluisset, si filii adversus eam pii fuissent, ut quicquid bonum mortalibus posset contingere, id filiis eius contingeret. precatatione peracta plastrum et matrem filii domum reduxerunt et fessi somno acquieverunt ..... at Cydippe diligenter agnovit nihil esse melius mortalibus quam mori, et ad hoc obiit voluntaria morte.

「アルゴスのヘラの巫女であったキュディッペは山の捧げ物をヘラの神殿まで運び、奉納しなけ

ればならないのに、放牧に出していた牛が現れず、死んでしまっていた。定刻に奉納がなされなければ、巫女は死刑となる決まりであった。クレオビスとピトンは慌てふためき、牛の代わりに軛を体に結んで、捧げ物と母キュディッペを車に載せて社まで運んだ。神事が終わってから、キュディッペはもし自分がヘラの神像をうやうやしく祭っていたのならば、もし二人の息子が彼女に対して親孝行であったのなら、人間に与えられる限りの良いことを二人にお与え下さいとヘラに祈った。それから二人の息子は再び母を車に載せて家まで連れ帰った。二人は疲れて眠りに就き（二度と醒めなかった）。キュディッペは死より良きことは何もないのだと悟り、自ら死を選んだ。」

ヘロドトスでは母親が巫女であったことは示されず、母親をどうしても社まで運ばなければならない理由の説明がなされていないが、ヒュギーヌスでは時間通り母親が社に着かなければ死刑という絶対的理由が示されており、緊迫度は著しく高まっている。ヘロドトスの話では必ずしも孝心を讃えた話とは言えないが、ヒュギーヌスでは母親を救うことが強調されており、明らかに孝子の話になっている。さらにヒュギーヌスでは *sacra* (奉納物) も車で一緒に運ばなければならないこと、母親の祈りは自分の敬虔さと息子の孝心の二つを前提においている点が異なっている。神に対する敬虔と子供の孝心が結び付けられているのは注目に値する。ヒュギーヌスが挙げているダーモンとピンティアというのは明らかに誤りで、これはアンピノモスとアナピオスの兄弟で、パウサニアスによるとカティナにはこの二人の像が *Eusebeis* (孝子像) として尊崇されて<sup>(16)</sup> いたという。この二人については他にギリシア人ではストラボン、ローマではセネカ、マルティアリス、シーリウス・イタリクス、クラウディアヌス等<sup>(17)</sup> が言及している。しかし何と言っても二人の徳を讃えるのは紀元1世紀に書かれたと思われるアエトナに及ばないであろう。<sup>(18)</sup>

*Amphinomus fraterque pari  
sub munere fortes  
cum iam vicinis streperent incendia tectis,  
adspiciunt pigrumque patrem  
matremque senecta  
eheu! defessos posuisse in limine membra.*

*parcite, avara manus,  
dulces attollere praedas:  
illis divitiae solae materque paterque:  
hanc rapiunt praedam.  
mediumque exire per ignem  
ipso dante fidem properant. o maxima rerum  
et merito pietas homini tutissima virtus!  
erubuere pios iuvenes attingere flammae  
et quacumque ferunt illi vestigia cedunt.  
felix illa dies, illa est innoxia terra.  
dextra saeva tenent laevaue incendia: fertur  
ille per obliquos ignes fraterque triumphans,  
tutus uterque pio sub pondere sufficit: illa  
et circa geminos avidus sibi temperat ignis.  
incolumes abeunt tandem et sua numina secum  
salva ferunt.*

「今や近くの家に火が迫った。アンピノモスと兄弟は老齢で足が悪くなった父、母が家の敷居に疲れた体を休めているのを見たとき、同じ務めに奮い立った。貪欲なものたちよ、大事な宝物を拾い上げるのを止めよ。あの二人には両親だけが財産なのだ。二人が持つて行く宝物は両親だけなのだ。火のまっただ中を通り抜ける二人に火は安全を保障する。おお、あらゆるものの中で最も偉大な孝心は当然ながら人間にとって最も安全な美德なのだ。炎は孝心篤き若者に触れることを恥じ、二人が進むところはどこでも道を譲った。かの日は幸いなるかな、かの地は罪を犯さなかった。右手も左手も激しい火炎が支配していた。アンピノモスが進むところ、火は傾き、兄弟は凱旋した。二人とも孝心の重みで無事であった。その、兄弟の回りだけは貪欲な火も力も抑えた。ついに二人は助かり、自分の神を無事に一緒に運んだのであった。」

貴重品に執着して多くの人が焼け死んでいく中、両親の事だけを考えて二人は助かった。pietas homini tutissima virtus (孝心は人にとって最も安全な美德である)。一般に神々に対して敬虔なものは神々が助けてくれるという信仰はあったが、ここでは神々に対する敬虔は問題ではなく、

親孝行ということが火、いや神に通じ助かるのである。642行で両親が numina (神) と言われていることは注目に値する。ギリシア、ローマ人にとって両親を救い出すことは神像を救い出すのと同じぐらい高貴なこと、敬虔なことと考えられてのであろう。

### III pius Aeneas の伝承

アエネーイスにおける pius Aeneas の考察に入る前に、このようなアエネーアースの伝承がどこまでさかのぼるのか、検討しておかなければならない。アエネーアースはギリシア語ではアイネイアースであるが、ギリシア文学でアイネイアースが登場するのはイーリアスが最初である。アイネイアースの性格についてはイーリアス20巻に記述がある。

「だが、他人の苦しみ故に、咎なき彼がなぜ苦難を受けねばならないのか、

広大な天空に住みたまう神々に、常に嘉納を受ける犠牲を捧げてきたにも拘らず<sup>(19)</sup>」

この箇所により、アイネイアースの性格が神々に対する敬虔さによって特徴づけられていたことがわかる。ただし、ホメロスでは父アンキーセースの名前は言及されるものの、二人の関係にまで立ち入った記述はない。ヘシオドスのテオゴニア、ホメロスのアプロディテ賛歌などもアンキーセースとアプロディテからアイネイアースが生まれることを語るのみである。イーリウ・ペルシスはアイネイアースがアンキーセースを連れてトロイアを脱出するさまを記述していると思われるが、プロクロスの梗概では、異兆を見てアイネイアース一行がイーダ山へ避難すると語られているだけである。ところがシキリアのディオドーロスにはトロイア脱出の様子はかなり詳しく語られていたようである。抜粋では次のようになっている。<sup>(20)</sup>

「トロイアが陥落したとき、アイネイアースは何人かのトロイア人とともに城市の一部に拠って向かって来る敵を防いだ。ギリシア人たちが休戦を結び、自分の持ち物は何であれ、持ち出すことを許したとき、他の者は金、銀、その他の高価なものを手に取ったのに対し、アイネイアースは年老いた父を肩に担いで連れだした。ギリシア軍はそれに驚き、再び彼に家にあるものから何でも好きなものを選ぶことを許した。アイネイアース

が家の神々を持ち出すに及んで、彼の徳は一層讃えられることになり、敵からの喝采を受けたのである。」

以下原文を引用する。

4 μίων ἐπισημασίας τυγχάνουσαν. ἐφαίμετο γὰρ ὁ ἀνὴρ ἐν τοῖς μεγίστοις κινδύνοις πλείστην φροντίδα πεποιημένος τῆς τε πρὸς γονεῖς ὁσιότητος καὶ τῆς πρὸς θεοὺς εὐσεβείας. διόπερ φασὶν αὐτῷ συγχωρηθῆναι μετὰ τῶν ὑπολειφθέντων Τρώων ἐκχωρῆσαι τῆς Τρωάδος μετὰ πάσης ἀσφαλείας καὶ ὅπου βούλεται. (Const. Exc. 2 (1), p. 211.)

「何となれば、危険のまっただ中であって父親に対する孝心と神々に対する敬虔を最も大切であると考えたように思われたからである。ギリシア軍はそれ故彼に残っているトロイア人とともに無事にトロイアの国を出て好きな所へ行くことを許したと言われる。」

ここにはアイネイアースが父アンキーセースを背負って逃げようとしたこと、さらに父祖伝来の神像を持ち出そうとしたことが比較的詳しく語られている。前者の行為には hosiotes という語が使われ、後者に対しては eusebeia が使われている。このアイネイアースの行動に対しギリシア軍は感嘆し、安全な逃亡を許したとある。ここに至ってアイネイアースは孝心と敬虔の二つの徳を体現する英雄になっているわけである。ただディオドーロスはカエサルからアウグストゥスの時代に執筆しているので、時の支配者への迎合が入っている恐れがあるが、前4世紀前半に書かれたクセノポンの「狩猟論」でもアイネイアースは父祖伝来の神々と父親を救って eusebeia の名声を得たとある<sup>(21)</sup>ので前4世紀始めには敬虔の徳に孝心の徳を併せ持つアエネーアース像が成立していたことがわかる。

### IV アイネーイスにおける pius Aeneas

ページはアエネーイスの序歌の注で pietas を「人間にあっては第1に神々、特に自分の家や国家の神々に対して、第2に両親、親戚、祖国に対する義務感をともなった敬意、愛である」<sup>(22)</sup>としている。やっかいなことに pietas は神々に対しても使われ、その場合、正義、慈悲、哀れみを意味する。ヘンリーはやはり同じ箇所の注で pietas

を心の優しさとり、*clementia* の同義語と見なしている。<sup>(23)</sup> *pity* のもとは *pietas* であり、次のような箇所では確かに「哀れみ」と解釈したほうがよいようである。

*Figite me, si qua est pietas, in me omnia  
tela / conicite, O Rutuli.*

「ルトゥリー人よ、哀れみの心があるなら、私を串刺しにせよ、わたしにあらんかぎりの投げやりを投げよ」(Aen. IX. 493)

ヘンリーはこのような例に留まらず、アエネーイスのほとんどすべての箇所に哀れみの心を読み取ろうとしているが、やはり行き過ぎであろう。

アエネーイスの序歌で詩神ムーサへの呼掛けの部分はアエネーイスを解釈する上で極めて重要である。

*Musa, mihi causas memora,  
quo numine laeso  
quidve dolens regina deum  
tot volvere casus  
insignem pietate virum,  
tot adire labores  
impulerit. tantaene animis  
caelestibus irae?*

「ムーサよ、理由を語れ、如何なる神意が傷つけられ／神々の女王が何を怒り、これほどの災いを、これほどの労苦を／*pietas* の著しい男にもたらしたのか、神々の心がこれほどの怒りを持つものか」(Aen. I. 8-11)

アエネーイスの構成はホメロスのイーリアスとオデュッセイアに強く負っており、アエネーイスにおける主要テーマの「ユーノーの怒り」というモチーフもオデュッセイアにおける「ポセイドンの怒り」を下敷にしている。罪なきアエネーアースがなぜ苦しまなければならないのか、という問いかけはオデュッセウスが何故苦しまなければならないのかとのアテーナーの問いかけに対応する。

「トロイエの広野、アルゴス勢の軍船の傍らで、オデュッセウスは殊勝にも、あなたに供物を捧げて呉れたではありませんか。ゼウスよ、なぜそれほどまでに彼を憎いと思ひ召しのか」(松平千秋訳) (Od. I. 60-62)

ゼウスは女神に答えてオデュッセウスの神々に対する敬虔さを肯定する。「その才覚は衆にすぐれ、また広大なる天空を占めるわれら神々に、

誰にもまして生贄を供えてくれた男ではないか」(Od. I. 66-67)

明らかにこのオデュッセイアの箇所はアエネーイスの序歌に対応している以上、この *pietas* は神々に対する敬虔と取らなければならない。12巻に至りトロイア人とラティウム人が融合し、トロイアの名前が失われ、融合した民族がユーノーを篤く敬うことをユピテルが保障するに及んで、長く続いたユーノーの怒りは鎮静する。

*hinc genus Ausonio mixtum  
quod sanguine surget,  
supra homines, supra ire deos  
pietate videbis,  
nec gens ulla tuos aequae  
celebrabit honores.*

「ここからアウソニアの血と混ざり合った民族が生まれ、その民族は *pietas* においてあらゆる人々、いや神々まで凌駕するであろう。汝を敬うことにかけても他のいかなる民族も及ばないであろう。」(Aen. XII. 838-841)

これはローマ人を特色づける言葉であるが、ユーノーに対して言われている以上、この *pietas* も神々に対する敬虔と解釈したほうがよいであろう。このようにアエネーイスの構成から考えるとアエネーアースの *pietas* は神々への敬虔の意味が強いと考えられる。しかし、前半1巻から6巻まででアエネーアースに対する父アンキーセースの影響の大きさはしばしば指摘されている。ウェルギリウスはまづ2、4、6巻を最初に取り上げたと伝えられるが、2、6巻でのアンキーセースの役割は極めて大きい。トロイア落城に際し、ヘクトルの亡霊と女神ウェヌスの説得によりトロイア脱出を決意したアエネーアースであったが、父アンキーセースが脱出を拒むに及んで、アエネーアースも討ち死にを決意した。アスカニウスの頭に火が現れるという異兆が出現するに及んでアンキーセースも脱出を決意するが、アエネーアースが如何に父の意志を尊重していたかがはっきり示されている。6巻で巫女シビユッラは地獄の河の渡し守カロンに次のように語りかける。

*Troius Aeneas, pietate insignis et armis,  
ad genitorem imas Erebi*

*descendit ad umbras.*

*Si te nulla movet tantae pietatis imago,*

「pietas と武勇によって名高いトロイアのアエネーアースが下界エレボスの底深く、父を尋ねて降ったのだ。これほどの pietas の姿に心を動かされることがないならば・・・」(VI. 403-405)

この pietate insignis は序歌とほぼ同じ表現であり、これだけだと神々への敬虔と取ることもできるが、続く pietatis imago (ピエタスの姿) とは父を尋ねて下界までも降りてきたアエネーアースの孝心以外には考えられない以上、このアエネーアースを特徴づける pietas は孝心のニュアンスも強く持つと考えなければならない。またエリュシオンの野にあったアンキーセースがアエネーアースを始めて認めたとき、次のように叫ぶ。

venisti tandem, tuaque exspectata parenti  
vicit iter durum pietas?

「やっとやって来たか、父親が待ち望んだ pietas が険しき道に打ち勝ったのか」(Aen. VI. 687-689)

この pietas は孝心そのもの、孝心の念篤きアエネーアースに他ならない。

アエネーイスの中の他の pietas の用法を分類してみると次のようになる。

1. アエネーアース個人もしくはローマ人を特徴づけていて、単独では判定できないもの。

pietate gravem ac meritis si forte virum quem  
／ conspexere. (I. 151-152)

quo iustior alter nec pietate fuit nec bello  
maior et armis. (I. 545-546)

Silvius Aeneas, pariter pietate vel armis  
／ egregius (VI, 769-770)

heu pietas, heu prisca fides invictaque bello  
dextra! (VI. 878)

hic pietate prior. (XI. 292)

2. pietas in deos (神々に対する敬虔) を表しているもの

hic pietatis honos? (I. 253)

nec te tua plurima, Panthu,  
labentem pietas nec Apollinis infula texit.

(II. 430-431.)

si pietate meremur. (II. 690)

quam nec longa dies pietas nec mitigat. (V.  
783)

cui medium freti pietate per ignem cultores  
multa premimus vestigia pruna. (XI. 787-788)

3. pietas in parentes (孝心) を表しているもの

“vade” ait, “o felix nati pietate.” (III. 480)  
animum patriae strinxit pietatis imago. (IX.  
294)

fallit te incautum pietatis tua. (X. 812)

et mentem patriae subiit pietatis imago. (X.  
824)

4. pity (哀れみ) の意味に近いもの

si qua est caelo pietas, quae talia curet (II.  
536)

このように見てくると、アエネーイスの pietas は神々に対する敬虔と孝心の二つの意味を強く持っていることは明らかで、アエネーアースの特徴である pietas もこの両義が基本であると考えることができる。ウェルギリウスは伝統的なアエネーアース像に忠実にアエネーイスを描いたわけである。

キケロは「国家論」(VI. 16) で pietas について「両親に対して、また血縁の者に対して重要であるが、特に祖国に対して最も最要である」と説明している。カエサルでの唯一の用例は愛国心に関するものであった。アウグストゥスは晩年、自分の業績録を銅版に刻ませたが、その中で元老院とローマ国民が武勇と寛容と公正と pietas の故に盾をくれたという箇所がある<sup>(24)</sup> が、ギリシア語文ではやはり eusebeia である。ところがアルル出土の盾には

pietatis erga deos patriamque (神々と祖国に対する pietas) と刻まれている。これは言うまでもなく「神々に対する敬虔と祖国愛」ということである。わざわざ「神々と祖国に対する」という言葉を付け加えたのは、単独であれば「孝心」という意味に誤解されかねないからであろう。ウェルギリウスがアウグストゥスの文化政策、宗教政策に協力したのは事実であるが、アエネーイスでは祖国に対する pietas はあまり見られない。アエネーアースは祖国を捨てた英雄である以上これはやむを得ぬことかもしれない。

#### まとめ

ローマ人は特別に敬虔な民族であると考えられてきたが、ギリシア的敬虔とローマ的敬虔はそれほど異なるものでもない。pietas は非常にロー

マ的美徳であると言われるが、*eusebeia* も *pietas* も両方とも「神々に対する敬虔」と「親孝行」という両義を古くから持っていた。子供が親を救うというイメージはギリシア人にとってもローマ人にとっても非常に尊いものであった。Aeneas が父祖伝来の神々と父 Anchises を救ったという伝承も非常に古いものであった。ウェルギリウスはアエネーイスの中で、*pius, pietas* をさまざまな意味で用いているが、やはり上の二つの意味が

中心である。ウェルギリウスが描いたアエネーアースは epithet の *pius* が示すごとく、伝統的 *pietas* の具現であって、兄弟愛とか祖国愛といった *pietas* の新しいニュアンスは少ない。アウグストゥスの時代に *pius, pietas* は宗教的ニュアンスを失いかけていたが、ウェルギリウスは神々に対する *pietas* を強調することにより、アウグストゥスの復古的宗教政策を助けたのである。

### 注

- (1) Cic. *De har. resp.* IX. 19  
Liv. XLIV. I. 11 etc.
- (2) Polyb. VI. 56. 6 sqq.  
Poseidon. ap. Athen. VI. 274 a
- (3) P. Chantraine, *Dictionnaire Etymologique de la Langue Grecque*, Paris, 1968, s. v.
- (4) od. XVI. 423; XXII, 412
- (5) カール・ケレーニイ『神話と古代宗教』高橋英夫訳、新潮社、昭和47年、p.145
- (6) Plato, *Euthyphron*, 13 D
- (7) Plato, *ibid.* 14 B
- (8) Xen. *Memorab.* I. 2
- (9) Xen, *Anab.* III. 2. 9
- (10) Xen, *Anab.* VI. 1. 19
- (11) Plin, *N. H.* VII. 121–122
- (12) Hygin, *Fab.* 254
- (13) Cic. *Disp. Tusc.* I. 47. 113
- (14) Paus. II. 20. 3–5
- (15) Hygin. *loc. cit.*
- (16) Strabo, VI. 2. 3 (C. 269); Sen, *Benef.* III. 37.; Martial. VII. 24. 5  
Sil. Ital. XIV. 197  
Claudian. *Carmina Minora*, XVII. (2)
- (17) *Aetna.* 626–643
- (18) II. XX. 297–299
- (19) Diodor. VII. 4
- (20) Xen. *Cyneg.* I. 15
- (21) J. Page, *The Aeneid of Virgil*. London. 1967, p. 141
- (22) J. Henry, *Aeneidea*, I, London, 1873, p. 175–187
- (23) *Res Gestae divi Augusti*, 34
- (24) K. Latte, *Römische Religionsgeschichte*, München, 1960, p.40, 注4